

どんりゅうしょうにん
呑龍上人

子育て呑龍で知られている群馬県太田市金山にある大光院（義重山新田寺という）の開山祖呑龍上人は、春日部市大字一の割浄土宗円福寺（『どんりゅうさま』の別名で呼ばれている）の門前にある井上家が生家である。

呑龍上人は、岩槻城主太田美濃守資正（のちに入道して三楽斎と号す）の家臣で知行地を市野割に持つ井上将監信貞、妻真弓の二男として、弘治二年（一五五六年）に生まれ、名を龍寿丸という。幼児期は近くの寺の影響をうけ、遊びも泥で仏像を造ったり、念仏を唱える子供であったが、寺子屋（大場の光明寺）に入って読書、習字、礼法を学び人びとから神童とたたえられた。

永禄十二年の春、十四歳のとき浄土宗白龍山林西寺（越谷市大字平方）第八世岌辨和尚ぎゅうべんの弟子となり、八月に得度とくどして名を曇龍と号した。後に悪龍を呑む夢をみて呑龍と改名したと伝えられている。

元亀元年（一五七〇年）四月 十五歳のとき岌辨和尚の推せんによって上京、増上寺の学寮（当時の最高学府であった）に入る。観智國師かんちこくし（源誉上人）げんよしようにんの弟子となり修業。後に入洛して然誉上人の勅号を拝受す年二十九歳也、まもなく岌辨和尚の懇請により林西寺のあとを嗣がれ、十七年間地方の教化に尽くされた。

天正十八年（一五九〇年）徳川家康が江戸に入府、家康は観智國師と共に呑龍を招き城中で法談を聞き、その秀拔を賞賛、学問料として呑龍に五十石を贈り、その後も数回林西寺に呑龍を訪ねている。

慶長五年（一六〇〇年）武州滝山（八王子）の大善寺の住職となり、同十八年観智國師の推せんにより家康の信任をうけ、大光院の開山として太田に來任した。吞龍五十八歳。この大光院とは、家康の祖先新田義重の追善供養のため、旧城跡付近の金山に建立されたものである。

当時、農民の生活は非常に貧しく、そのために生まれてくる子供を養育することが困難で、背に腹は替えられぬ農民はやむを得ず、國では固く禁じられていた「間引き」をして人口を制限していた。吞龍はこの悪風習を嘆いて、村むらを説いて廻り貧しい者には救いを与え、寺領二百石は貧兒養育の糧として提供した。本来寺領は寺の維持や学僧養成のためのものであるが、一山の僧にも質素節約を励して貧兒救済にあたった。

幕府は驚き吞龍に善処方を命じた。吞龍は困惑してしまい、結局子供が生まれたら七歳迄は大光院の弟子とすることを考え、その処置を講じて貧兒救済にあたった。

「吞童子」とは、七ツ坊主といつて頭髮を型に残すことにして弟子入りしたと認めた風習で、今でも続いている。これが「子育て吞龍」といわれるゆえんである。

元和八年（一六二二年）後水尾天皇より紫衣の勅許の論旨を賜り、元和九年八月九日六十八歳で入寂した。しかし、吞龍の高徳に寄せられた庶民の尊敬の念は今日まで引きつがれている。

一の割田福寺本堂前に吞龍上人生誕地と記された表示板がある。田福寺では、毎年四月八日吞龍上人のお開帳が行なわれている。